

※内容的にHTML版では読みにくい可能性もあるので、PDF版を用意しました。当初はHTML版をメインにする予定でしたが、今後はPDF版の方が最新版になることもあります。どちらが最新版かは、PDF版ではページ最上部、HTML版ではページ末のタイムラインでご判断下さい。なお、注記番号等に多少不備があるかも知れませんが、次回改訂で修正しますので、ご容赦ください。

(2016.12.15)

聖書信仰を問いなおす

はじめに(総序)

一時は教会学校にも通いながら、結局キリスト教信仰を得るにいたらなかったわたしが、キリスト教について永年にわたって生きてきた違和感になんとか言葉を与えるべく模索し考察した結果を少しずつまとめてゆきます。

どの宗教でもそうでしょうが、キリスト教の歴史においても、今までさまざまな逸脱が行なわれてきましたし、現に行なわれています。果たしてこれはイエス・キリストの福音が正しく伝えられ解釈された結果なののでしょうか、それとも違うのでしょうか？ 本サイトは、現代のキリスト教がかかえるさまざまな問題、特に彼らによる「聖書解釈」とその「逸脱」について、ノン・クリスチャンながら一度考え直してみたいと思って起ち上げたものです。(※その関連としてキリスト教から少し離れた内容も一部あつかう予定です。その際に取り上げる事柄は必ずしもキリスト教だけに限った問題ではありませんが、本サイトではキリスト教との関連を含めてその問題を取り上げます。)

※今後少しずつアップしてゆきますので、あるいは説明不足等もあるかも知れません。忌憚のないご意見・ご批判をお待ちしております。なお、サイトタイトルはあくまで暫定的なものです。適切なタイトルが決まり次第改題を予定しています。

序文:万人に開かれた聖書解釈を

わたしにむかって「主よ、主よ」と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行^{みむね}う者だけが、はいるのである。その日には、多くの者が、わたしにむかって「主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行^{みむね}ったではありませんか」と言うであろう。そのとき、わたしは彼らにはっきり、こう言おう、「あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ」。

(マタイ 7:21-23)

わたしはクリスチャンではありませんが、福音書を中心に聖書に長年親しんできました。

聖書を読んで、あるいは牧師の説教を聞いたりして、躓いたり反発を覚えたりした人も多くいることと思います。わたしもその例外ではありません。わたし自身、聖書は口語訳で三回、新共同訳（続編付）で一回通読しているのですが（わたしの場合、通読は一日二章ずつ、新約から始めて旧約、そして新約と読み進めます）、わたしが特に違和感や反発を覚えた箇所は、いま思い出すだけでも、旧約で二箇所、新約で二箇所あります。今その内容には触れませんが、このサイトは、そのような聖書の箇所に真正面からアプローチしてみることもその目的の一つとしています。

※このサイトは、当初はある程度まとまった形でアップする予定でしたが、いろいろと勉強しなければならぬことも多く、そのため少しずつ書いてアップしてゆくことにしました。現在執筆中の文章に関しては、マックス・ウェーバーの研究などに準拠しながら、まずはカルヴァニズムとその功罪、それが近代世界に与えた影響などについて考察してみたいと考えています。少しずつアップすることもあると、時に重複等もあるかと思いますが（折を見て加筆・訂正等の調節等の作業を行なう予定です）、その辺はどうかご容赦ください。

はじめに——ヘレム=キラーを名乗る所以——

本サイトは、当初 anti-biblia.com のドメインにてアップしましたが、レンタルサーバーの廃業を機にドメインを herem-killer.com と改め、新規にアップす

ることにしました。新規ドメインの由来等については、現在執筆中の論考の次に執筆予定の文章にて詳論いたしますが、これは当初から当サイトの管理人のハンドル・ネ

ームとして用いていたものです。ここではごく簡単に説明するにとどめます。

まずヘレムないしヘーレム (herem) とはヘブライ語 (ギリシア語形はアナテマ) で、一部の聖書ではこれを「聖絶^{せいぜつ}」と訳しています。また、キラー (killer) は殺し屋を意味する英語¹ で、それに「嫌い」をかけています。このヘーレムの意味等についてはいずれ詳しく書きますが、本来はヨシュア記などにおける異民族殺戮その他を内容として含む宗教的・儀礼的用語です。そのような特殊な用語に聖戦を連想させるような「聖絶 (sacred eradicate)」なる語を与えることにわたしは非常なる疑問をいただいています。執筆の順序は逆になりましたが、この語に対する違和感や憤りの気持ちが本サイトを公開する動機の一つとなっています。異論はあると思いますが、わたしは旧約聖書に特有のヘーレムの原義を多少拡大解釈して、「聖絶」を旧約時代に特有のいわゆる「聖戦」² を意味する語にとどまらぬ、現代における民族浄化やジェノサイドをも意味する語としてこの語を解釈しています。

このようなテーマは、ひと言で言えば「旧

約聖書と戦争」とか「キリスト教は戦争好きか」、あるいは「暴力と聖性」といったテーマとして括することも可能でしょう (以上は、わたしが読んだ、ないし未読ながら手許にある本の題名から採りました)。そのため、この問題を本格的に論じるには、旧約時代に限らず、中世の十字軍や魔女狩りはもちろん、ホロコーストや近年の宗教テロにも目を向ける必要があります。もともとこの手の問題に不案内だったわたしは、そのために、ホロコーストをはじめとする現代史に関する著作などにもここ数年いろいろと目を通してきました。そんな関係から、わたしの関心がキリスト教そのものから最近だいぶ外れてきたことも事実です。本サイトではキリスト教とホロコーストの関係等についても今後取り上げる予定ですが、場合によっては議論がキリスト教からかなり逸脱する可能性もあります。したがって、キリスト教との関連はあるものの、直接キリスト教と関係するわけではないテーマをも包括するサイトとして、ここに新たなドメインを設けた次第です。(ただしここ1~2年はキリスト教に限定したテーマを追いかけることに違いはありません。したがってここしばらくは、サイト名の「聖書信仰を問いなおす」はそのままとします。)

(2013年7月5日追記)

1: 万人に開かれた聖書解釈

クリスチャンの中には、わたしのようなノン・クリスチャンが聖書を個人的に解釈

することに否定的な考えを持つ人が多いと思います。しかしながらわたしは、牧師経

*1 研究社英和中辞典によれば、他に「驚異的なもの、すごいもの、素晴らしいもの」、形容詞としては「厳しい」という意味もあります。

*2 岩波書店訳の旧約聖書でも「聖絶」の語が採用されていますが、岩波訳ではヘーレムの意味を古代パレスチナ世界における「聖戦」の意味に限定して用いています。

験もある宗教哲学者・谷口隆之助が言う意味で、聖書を《万人に共通の「宗教的古典」》^{*1}と捉えたいと考えています。

《わたしは聖書をキリスト教の正経として語ったのではなく、それを万人に共通の「宗教的古典」として語っている》《現代のような時代においてはとくに、さまざまな成立宗教におけるそれぞれの経典を、万人に共通の宗教的古典として、ひとりひとりがじかに自分の膝で読むことが非常に大切だ》^{*2}とする谷口は、「宗教的古典」について次のように説明しています。

……さまざまな古典のなかで、宗教的古典がまさに宗教的古典として他の諸古典と区別されるその根本の特徴はどこにあるのであろうか？
それは、端的に言えば、それが自然科学的な文書でもなく、また単に人間の文化的・社会的生の次元における諸現象やまた諸価値にかかわる文書でもなく、それが人間存在の究極の次元における人間としての究極の

在りかたを開示し、そこにおける豊穡ないのちと存在との体験を伝達しようとする文書であるところにある、とわたしは見るのである。

(谷口前掲書、p.190～191)

もつとも、このように聖書を万人に共通の「宗教的古典」と捉えた場合、それは、**聖書といえども**他の宗教の聖典と同等の存在として（悪い意味でなく）相対化されることを意味しています。このような立場を受け入れられない人も少なからずいるでしょう。しかしながら、聖書をクリスチャンの専有物とすることで、キリストの精神から多くの人を遠ざける結果になっては意味がありません。異論はいろいろとあるとは思いますが、聖書の解釈も、ひとりクリスチャンだけのものではなく、万人に開かれたものであるべきだとわたしは信じています。何となれば、本来キリストの言葉は、キリスト者であるとないとを問わず、万人に向けられたものであったはずだからであります。

2: 本サイトの意図するもの: 単なる聖書批判・キリスト教批判を超えて

このような立場を表明すると、わたしが高等批評的な聖書の読み方をして単にキリスト教や聖書信仰を批判しようとしているのだと思う人があるかもしれません。聖書をキリスト教の正^{せい}経^{きやう}としてではなく、それを万人に共通の宗教的古典として捉える

立場がリベラルな聖書学の立場と親和性をもちやすいことは事実です。もちろんわたしも聖書学者の本を好んで読んではおりますが、しかし、聖書学的な知識を援用して、本サイトで単なる聖書批判を行なうつもりはありません。わたしが批判的なアプロー

*1 谷口隆之助『聖書の人生論——いのちの存在感覚——』「附 宗教的古典としての聖書」(川島書店、1979年)参照。以下、引用文中において、傍点の部分は原著でも(著者による)傍点、傍点でないゴチック(時に赤字)は引用者による強調。以下同じ。

*2 谷口隆之助『聖書の人生論』川島書店、1979年、p.190.

チを目的としてこのサイトを公開したことは事実ですが、それは、わたしがキリスト教に敵意や悪意を持っているがゆえではありません。単に聖書やキリスト教を一方的に非難したり攻撃したりすることがこのサイトの目的ではなく、当然ながら本サイトはキリスト教否定を目的としたサイトではないのです。

そこで、誤解を解く意味もかねて、聖書解釈に対するわたしの立場を表明しておきたいと思います。

聖書批判に関しては、わたしはこのように解釈しています。たとえば「聖書は神様のラブレターだ」とよく言われます。意外に思われるかもしれませんが、わたしはそのことを否定するつもりはありません。ただわたしは、たしかに聖書は人間に対する神様の思いを人間が代筆した書物ではあるのだけれど、その代筆時に（人間を通して）聖書に誤ちが紛れ込んだのだと捉えているのです。要するに聖書は、“人間が神の言葉を誤って聞き取った記録”でもあるということです。福音主義や聖書根本主義の人たちは当然ながらこのような見解を否定するでしょう。けれどもわたしは、聖書が神の言葉のある時は正しく、ある時は誤って聞き取った記録だからこそかえって ^{リアリティー} 真実を宿しているのだと考えています。その意味で聖書とは、その時代により、また読む人により、そのつど正しく解釈され（解釈し直され）続ける必要のある書物であるのです。したがって聖書とは、過去に書かれた死んだ文書ではなく、今も生き生きと人間に語りかけている生きて書物なのです（このことに関してはいずれ詳しく書きたいと思っておりますが、とりあえずはマルティン・ブーバー『出会い 自伝的断片』最終章「サムエルとアガグ」〔児玉洋訳、実存主義叢書 13、理想社、1966 年〕をご参照くだ

さい）。

先に引用した谷口は、同じ箇所が続けて次のように書いています。

……人間の歴史の中で、「宗教」と呼ばれてきた、人間の追求また営みのその根本の意図は、人間が、自らの存在のその究極を追求し、その究極の次元において人間としての究極の生きかたを実現しようとするところにあったのだ、ということである。つまりひとがそれぞれに人間としての究極の人生態度を実現しようとするところこそ、本来の宗教的追求にはほかならないのである。そして、さまざまな宗教的古典は、そのことを明瞭にもの語っているのである。

それゆえに、わたしはさまざまな成立宗教が実際にはどのような状況を呈していようと、そのことによって宗教本来の意図が人間にとってまったく不要になったとは決して見ないのであり、むしろ、宗教本来の意図に照らして、さまざまな成立宗教における宗教偽造の、あるいは宗教の形骸化の実体を明瞭にすべきだ、とわたしは考えるのである。

言いかえれば、さまざまな成立宗教におけるその宗教性の真偽は、その宗教集団の現実が、その集団に属する信徒のひとりひとりにたいして、真に人間としての究極の人生態度を実現させるために機能しているか否かにかかっている、ということなのである。また、ひとりのひとのその宗教性の真偽は、単に教団の規則や戒律にたいして忠実であるか否かとか、あるいは単にその教理や信

条をかたく信じるか否か、ということにあるよりは、そのひとが、その実人生を人間としての究極の人生態度において生きているか否か、あるいはそのひとがその実人生を真に愛を動機として生きているか否か、にかかっているということなのである。

(谷口前掲書、p.191～192)

すなわち、谷口の言う《宗教本来の意図に照らして、さまざまの成立宗教における宗教偽造の、あるいは宗教の形骸化の実体を明瞭にす》¹ という意味においてキリスト教に対して批判的なアプローチをしたいと、このようにわたしは考えているのです。批判の意義についてはいずれきちんと書きますが、わたしは批判もまた立派な「対話」だと捉えています¹。わたしにとって正しい批判とは創造的な行為でもあるのです。

それに加えて、まだ先の課題としてではあるものの、本サイトは究極的には宗教対話をも意図しています。ただ、そのためには（有効にそれが展開できるかどうかは別にして）比較宗教・哲学的な立場を取ることが必要になります。その場合は、その前提として、わたしが「宗教」をどのように捉えているか詳しく説明する必要が必然的に出てくるでしょう。けれども、残念なが

ら今ここでそれをしている余裕がありません。そこで、わたしにとっての宗教の定義をとりあえずひと言で言えば、宗教とは「人間が人間になるために」あるとだけ言っておきましょう（いずれ詳しく書く必要があるでしょうが、ここで言うところの「人間」は、必ずしもヒューマニズムの範疇にとどまる人間ではなく、死や病といった限界状況の中で、人がそれまでの日常的な生き方を転換して以後いかに生きるか、その間いの中で開示される霊的=実存的な生命としての「本来の自己」を意味しています）。その意味でわたしが関心を持つのは、キリスト教に限らず、「その宗教がいかにその人間を真に人間たらしめる力を持つか否か」です。しかもその力（これを「働き」と言ってもよいでしょう）は、ひとりキリスト教だけが有しているものではありません（その意味でわたしは、福音はキリスト教の専売特許ではない、すべて真実の信仰は福音なのだと思っています）。それと同様に人間を非人間化せしめるような宗教があるとすれば、それがキリスト教であろうと仏教であろうと、あるいはどのような信仰であろうと、それは間違った宗教であり信仰なのです。わたしはそのように信じています（ただし、わたしがそのような正しい信仰態度を生きていると言いたいわけではありません。全く正反対だというのが偽らざるところです）。

*1 詳しくは次章の「有意義な批判的対話のために」を参照。

3:最後に——余は何故にして基督信徒と成らざりし乎——

先にも触れたように、わたしはクリスチャンではなく、しかも他の宗教を信仰している者^{*1} ですが、もともとは幼稚園および小学校がプロテスタントで、中学二年から大学一年頃までは、さぼりながらも教会学校に通っていました。現在の信仰を高校生の際に得て以来しばらくは迷ったのですが、大学卒業と同時にクリスチャンになることは諦めました。けれども、キリスト教には今もとても興味をいだいています。要するにわたしはプロテスタントの神学に対して愛憎半ばする感情を長くいだいてきたわけですが、学生時代に遠藤文学に触れ、そのご縁から遠藤周作の友人でもある井上洋治神父の初期の著作に親しむことで、キリスト教全般に対する違和感がだいぶ薄れたことも事実です。それに加え、20 数年前からは聖書学者の著作にもいくらか親しむようになり、キリスト教に対する違和感はずいぶん少なくなってゆきました。もっともキリスト教に対する違和感は、以前は「キリスト教はどうしてこんなにも排他的なのか？」という疑問としてこれを捉えていました。それが 15 年ほど前に、あることをキッカケに、どうやらその違和感は、プロテスタント神学をある意味で代表するカルヴィニズムの神学がどうしても肌に合わなかった、それが原因らしいということに気がつきました。そんなわけで、「わたしが

何故キリスト教に帰依する——キリスト教ではこのような（仏教的な）表現は使わないかもしれませんが——ことができなかつたのか？」という《問い》は、実はわたしにとっても永年のテーマだったのです。それがこのようなサイトをつくった理由ともなっています。

そういった意味で言えば、わたしがキリスト教について追求するその背後のテーマは、内村鑑三をもじって言えば、《余は“^{なにゆえ}何故にして” 基督信徒と成らざりし乎》^{*2} であると言ってもよいと思います。内村の場合は、自著の前書きで自らが述べているように、日記を中心とした《如何にして》^{い か}を主とし、《何故》^{なにゆえ}を排していますが、わたしの場合は、その追求はあくまでも《何故にして》^{なにゆえ}であります（個人的なことはこの序文において「自己紹介」として多少書きましたが、これ以降は個人的な事柄は基本的に捨象して、先にも注記したように最小限の記述にとどめる予定です）。

なお、最後に誤解のないよう申し添えておきますが、わたしはノン・クリスチャンとして十字架の贖罪などの教義は当然ながら信仰しておりません（否定しているわけではありません）。しかしそんなわたしも、どうやらかなり熱心な Jesus ファンではあ

*1 考えるところあって、ここでは自分の信仰については基本的に云々いたしません。キリスト教に対して批判的なアプローチをする場合も、自分の宗教の教義等は脇へおいて考察してゆきます。だから、ここで自分の信仰の枠組みに照らしてキリスト教に対して批判的なアプローチをするつもりはありません。それにわたしの関心は、少なくとも宗教の比較優劣を論じることにはないのです。わたしは宗教の教義やその教義の違いについては今はあまり興味がありません。

*2 内村鑑三『余は如何にして基督信徒となりし乎』岩波文庫

るようです。わたしもまた、遠藤周作の言うところの「キリストにその人生を横切られた」人間の一人であるのかもしれない。

皆さまの忌憚のないご意見・ご批判をお待ちしております。

凡例その他

凡例

※HTML版と共通。そのためPDF版と齟齬のある部分もあるが、そのままとする。

〔表記〕

〈表記全般〉

1) **漢字表記**等に関しては、共同通信社の『記者ハンドブック[第12版]』におおむね準拠しつつも、必要に応じて表外表記も用いる。

〈使用する聖書および聖書書巻名等の表記〉

1) **聖書の書巻名**は原則として口語訳聖書のものに準拠しながらも、必ずしも正式名称ではなく、「マタイによる福音書」を「マタイ福音書」「マタイ伝」などとする。また、引用文中や注記等での表記にはさらに短い**略称**を用いる〔別表「聖書書巻名」参照〕。

2) **聖書の引用**は、口語訳聖書を主とし、必要に応じて新共同訳や新改訳その他の聖書を使用、口語訳以外はどの翻訳を使用したか明記する。なお文語訳に関しては、引用の際は、歴史的仮名遣いはそのままに、旧字体の一部を新字体に改める。

3) 聖書の引用箇所当たる**章節の表記**は、原則として聖書書巻名の後に半角の空白を入れ、全角数字で章を示し、その後に全角のコロン(:)を付して半角数字で節を表記。また、節が複数にわたる場合は最初の節と最後の節を半角のハイフン(-)で結ぶ。なお、新共同訳等において節をまとめて翻訳している時に用いられるハイフン(-)は原則アンド(&)を用いてこれを区別する。また、節の中途からの引用などで専門書等において行なわれている節数字の後のaやbの表記は原則用いない。

4) 新共同訳と口語訳その他において**聖書の章・節に異同のある場合**(特に旧約)は新共同訳の章・節を用い、必要に応じて口語訳その他の章・節を付記する。

〈地名および人名等の表記〉

1) **聖書中の人名・地名**などは基本的に口語訳聖書において用いられている表記を使用するが、特に旧約聖書中のオリエントの王国名などは一般の歴史教科書等で使用されている表記を用いる。

2) **聖書以外の人名・地名**は、いたずらな原音主義をとらず、おおむね人口に膾炙している表記を採用する。ただし、**引用文中などにおける表記**は当然ながら原文を尊重し、翻訳書での著者名も翻訳者が採用した表記を踏襲する。

〈ルビその他のブラウザ依存および機種依存文字の表記〉

1) **傍点**に当たる表記はイタリック体で表わす。特に**引用文中における傍点**は、原著者によるものは黒字のイタリック体、引用者によるものはイタリック体でない黒字のゴチックで表記する(なお、引用文中におけるゴチックのイタリック体は原著者による傍点をさらに引用者が強調したものとする)。

2) **機種依存文字**の丸数字やギリシャ数字は、引用文中などで用いられている場合でもなるべく他の表記に変える。

[引用その他]

〈引用〉

- 1) 孫引きは極力避けるものの、已むを得ない場合は必ずその旨及び引用元の書誌情報等を注記する。ただし、邦訳のない外国文献からの引用(孫引き)の場合は原書等の引用元の書誌情報は特に示さない。
- 2) 引用文その他で英語以外の原音が表記されている場合、無理して表記せず、また、読み手にとって煩雑と感じた場合は、たとえ英語でも省略する。
- 3) 文中での引用はカギ括弧(「」)ではなく二重山括弧(《》)を用い、引用元の明記は基本的に引用文最後に示す。なお、カギ括弧(「」)で引用をする場合は必ずしも正確な引用でない場合に用いるが、その際も極力出典を明記する。

- 4) 引用文中の引用者(筆者)による補足ないし注記は、角括弧([]等)を用いて挿入するか、別に注記する。また、引用文に対する原著者などによる注記等は原則として省略するが、必要な場合は同じくこれを角括弧([]等)にて引用文中に挿入(引用)するか、注記として別記の上これを“引用”する。

〈注記〉

- 1) 注釈類は原則として各項目の末尾にまとめて示す。
- 2) 注釈は「補説」と「注」に分けて適宜番号を振った。なお「補説」は、本文中には述べられないが、注記するにはいささか長すぎる議論の時に用い、注記と同様、各項目の最後に配置する。

[参考文献]

- 1) 参考文献は、その章で言及したり引用した文献の全てではなく、その章を書き上げるに当たって特に利用し参考にしたものを挙げ、それ以外のものはそのつど本文中に注記の形で示す(※ただし、現在はサイト開設間もない段階でまとまった論考もない状態であるため、本文中に参考文献の項目は設けていない)。
- 2) 参考文献における出版年は原則として初版の出版年月のみを表記し、必要に応じて新

- 版等の出版年月等も記す。ただし、参考にした文献で旧版と新版を挙げた場合は原則として新版を利用したが、新版以外を利用した場合(両方用いた場合)はその版に*印を付す。
- 3) 参考文献は当然ながら実際に目を通した文献に限って挙げるが、本文中の注記などにおいては必要に応じて未読ないし部分的に読んだだけの文献も挙げる。その場合は原則として注記中などにおいてその旨明記(例:未読、非通読など)する。

参考文献類

□聖書

◆利用(引用その他)を予定している聖書
(現在手許にあるもの)

文語訳聖書

口語訳聖書

新共同訳・続編付(以上、日本聖書協会。※
以下、「協会訳」とした場合は上記の聖書
を指す)

新改訳聖書(第2版、第3版、日本聖書刊行
会)

新改訳聖書 注解・索引・チェーン式引
照付(聖書刊行会刊行+いのちのこと
ば社発売、1981年、2008年改訂新版3
刷) ※本書は多少の注解等も付い
ているため別掲した。

岩波書店版(岩波委員会訳)聖書

※以降、「岩波書店版(訳)」ないし「岩波版
(訳)」、あるいは「(岩波)委員会訳」と略
記。

旧約聖書翻訳委員会訳・旧約聖書(合
本分冊版*＝旧約聖書〔1〕律法、〔2〕
歴史書、〔3〕預言書、〔4〕諸書。*分冊
〔全15巻〕と区別するため、以下このよ
うに表現する。)

新約聖書翻訳委員会訳・新約聖書(合
本版、以上、岩波書店刊。以下、上記
両書を「岩波書店訳」ないし「岩波
訳」、あるいは「(岩波)委員会訳」と略

記)

フランシスコ会聖書研究所訳注・聖書 原文校
訂による口語訳

聖書 原文校訂による口語訳(旧・新約
聖書合本版、サンパウロ、2011年)

新約聖書(合本版、サンパウロ、1980年
初版、1984年改訂初版。以下、「フラ
ンシスコ会訳」と略記。※なお、合本版
と比べて書巻名以外に脚注も大分少
なくなっているため、新約に関しては
本書も並行して用いる。)

新約聖書 共同訳・全注(講談社学術文庫、1
981年。単に「共同訳」と言った場合は本書
を指す。)

◆今のところ使用を予定していないが、参
考にするかも知れない手許にある聖書

山浦玄嗣訳 ガリヤラのイエシュウ 日本語
訳新約聖書四福音書(第2版、イー・ピック
ス出版・2012年刊)

平明訳 新約聖書(ウィリアム・ギャロット監
修、角川文庫、1999年)

リビングバイブル(新約聖書のみ、旧約未所
有、いのちのことば社出版
部、年)

□注解およびキリスト教辞典類

◆注解類

新共同訳・旧約聖書略解(日本基督教団出
版局、2001年)

新共同訳・新約聖書略解(日本基督教団出
版局、2000年)

※必要に応じて図書館所蔵の口語訳・旧約
および新約聖書略解も利用予定。

BIBLE navi 聖書新改訳 解説・適用付(い
のちのことば社出版部、2011年、2012年再

刷)

版対応、日本聖書協会発行、いのちのことば社発売、1979年)

◆辞典類

聖書思想事典[新版](X・レオン・デュフル編、三省堂、1999年)

キリスト教神学基本用語集(J・ゴンザレス、教文館、2010年)

新共同訳聖書 コンコルダンス 聖書語句索引(新教出版社・1997年)

新改訳聖書 ハンディー・コンコルダンス(第2

◆PCソフト類

J-ばいぶる 1set 2000(ライフソフトウェア発行+いのちのことば社発売)

※口語訳・新改訳(第2版)・新共同訳・英語新欽定訳(NKJV)・現代英語訳(TEV)各聖書所収。

聖書の達人(※購入予定)

□その他一般の辞典類

岩波小辞典・哲学(栗田賢三+古在由重編、岩波書店、1955年)

実存主義事典(松浪信三郎+飯島宗享編、東京堂出版、1964年)

現代哲学事典(山崎正一+市川浩編、講談社現代新書、1970年)

現代思想事典(清水幾太郎編、講談社現代新書、1964年)

宗教学事典(東京大学出版会、1973年)

新・佛教辞典[増補](中村元監修、誠信書房、1965年6月、1980年3月増補版)

※他に『世界大百科事典』や『現代用語の基礎知識』、また、図書館などで適宜利用する予定の事典類(平凡社『哲学事典』など)や注解書等は省いた。国語辞典類や英和辞典等も同様。なお、専門の学術論文を書いているわけではないので、百科事典や一般の用語事典類も活用する。ただし、Wikipediaは間違いも多いため、参考にはするものの出典としては基本的に利用しない。

□参考書

※ここでは本サイト全体で特に参考にしたものを挙げる。適宜改訂。ただし、かなり影響を受けている本でも、しばらく読み返しておらず、詳細な内容をあまり覚えていないものはあえて挙げていない。

エーリッヒ・フロムの著作

『自由からの逃走』(日高六郎訳、東京創

元社、現代社会科学叢書、1951年、1965年新版)

『人間における自由』(谷口隆之助、早坂泰次郎訳、東京創元社、現代社会科学叢書、1955年、1972年改訂)

同『精神分析と宗教』(谷口隆之助、早坂泰次郎訳、東京創元社、現代社会科学叢書、1953年、1971年改訂版、※以上三冊を個人的に(フロムの)「自由三

部作」と呼んでおり、この表記を今後も用いる。）

マックス・ウェーバーの著作

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(大塚久雄訳、岩波文庫、1989年改訳)

谷口隆之助の著作

『聖書の人生論』(川島書店、1979年5月)他

早坂泰次郎『人間関係学序説』(川島書店、1991年4月)